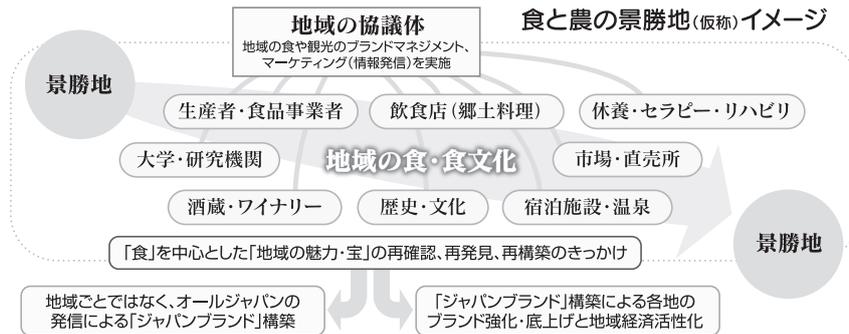


農業と食、観光の恵まれた資源を持つ十勝は2016年、世界への飛躍に向けて新たなステージを迎えそうだ。農林水産省は新年度、多様な地域の食（文化）の魅力をも効果的に海外発信する重点地域を支援する制度「食と農の景勝地（仮称）」を創設する。十勝は農産物の品質管理・向上を図る「十勝型GAP（農業生産工程）」などの先進的な取り組みを掲げ、認定に名乗りを上げる動きが出ている。初年度は全国数カ所が選ばれる見通しで、農水省は十勝の機運の高まりに期待している。



昨年の訪日旅行者数は過去最多の1900万人超で、滞在中の食関連消費額は約6000億円に上る。政府は東京五輪・パラリンピックが開かれる20年の訪日旅行者数を同2000万人に増やす計画で、6次産業の市場規模拡大などを目指す農水省もフランスの美食健康都市構想や「味の景勝地」制度などを参考に新制度をつくることにした。

新制度の構築に向けては昨年9月、観光、海外、広報の有識者13人による検討委員会（委員長・寺島実郎日本総合研究所理事長）が初会合を開催。地域の食（文化）と気候、風土、歴史などの観光資源を一体化した「景勝地」形成などに理解を深めた。検討委の下で分科会も開かれている。

申請には、地域の大学・研究機関や生産者・食品事業者、飲食店、市場、宿泊施設などと連携し、地域のマネジメント組織となる「協議体」を設ける必要がある。「協議体」は地域の食と観光のブランドマネジメント、マーケティング（情報発信）を担う。各地の優れた資源は「オールジャパン」でPRされる。

農水省は新制度について中川郁子衆院議員（前農水相政務官）にも説明。中川氏は地元農業団体に「協議体」

発足を働き掛けるなど、オール十勝で認定を目指す方向となっている。検討委の論議で面積など認定基準も固まるが、農水省は「委員には今のところ『広域でも問題ない』との意見が多い」としている。

十勝が選ばれた場合は畑作のGAPのみならず、酪農・畜産分野の品質管理・向上対策も優れた取り組みとして発信し、地域ブランド強化につなげるビジョンが期待される。国立・国定公園の活用などを位置付ければ、斬新な旅の仕組みづくりにも役立つ。

新制度の開始に向け、農水省は2月に2回目の検討委を予定。その後のパブリックコメント募集を経て、今年度中に開く最終の委員会で申請要件などの骨子を詰める。認定は来年度からを見込み、地域を順次増やしつつ一定期間ごとに更新する形も描いている。

農水省食料産業局食文化・市場開拓課の渡邊肇日本食普及推進専門官は「当初の認定地域は、食など一定のブランド価値を持つ地域が選ばれる可能性がある。海外発信など必要な支援は、省庁横断での対応も考えている」と話している。



竹山幸雄さん

道の酪農発展に寄与した人を表彰する「第48回宇都宮賞」に、豊頃町の竹山幸雄さん（61）＝JA豊頃町元畜産部長＝が選ばれた。宇都宮仙太郎翁顕彰会（札幌）が8日、発表した。

同賞は道の酪農の礎を築いた故宇都宮仙太郎氏の功績をたたえ1968年に創設された。酪農経営、酪農指導、乳牛改良の3部門で毎年表彰し、十勝の受賞者は今回を含め24人となる。

竹山さんは酪農指導の部での表彰。家畜人工授精士としてJA豊頃町で1973年から約41年間にわたり乳用牛改良をけん引した。